陶芸の森の事業等のあり方について

資料１

1. 設置目的の現代的な視点での捉えなおしについて

第1回懇話会において、陶芸の森の設置目的(「陶器産業の振興」「陶芸文化の向上」)について、「現代的な視点」で捉えなおしたうえで事業内容を検討し、次の30年を見据えた設置目的とすべきとの意見があった。
また、設置目的に「交流」という視点を据えることが重要との意見もあったところ。すでに条例の目的には「交流」という言葉が入っているところではあるが、この点についても「交流」の設置当時とは異なる現代的な視点での捉えなおしが必要。

今後の陶芸の森の事業のあり方の方向性を検討するにあたって、この「現代的な視点」が**すべてに共通する大きな考え方になる**ことから、設置後30年以上経過したなかで**「現代的な視点」とはどのようなものか**整理する必要がある。

「設置目的」･･･滋賀県立陶芸の森の設置および管理に関する条例第1条
第1条　**県民の陶芸に対する理解と親しみを深め、広く陶芸に関する交流の場とすることにより県の陶器産業の振興と文化の向上を図る**ため、滋賀県立陶芸の森(以下「陶芸の森」という。)を甲賀市信楽町勅旨に設置する。

現代的な視点とは･･･

- 情報発信ツールの拡大･･･　相互交流の可能性
- DX、GX　･･･　デジタルアーカイブなどによる県民との陶芸品の共有
- SDGs、MLGs　･･･　間伐材･薪窯の活用など
- 地方創生(地域の活性化)　･･･　陶芸の森から地域へ
- 公園としての魅力向上(THEシガパーク)　･･･　他施設等との連携、集客面での取組
- グローバル化　･･･　国際的な交流の可能性
- アートと社会的処方　･･･　社会とのつながりを“処方”し、孤立を防ぐ　など

2. 陶芸館のあり方について

陶芸の森の今後のあり方を考えるうえで、陶芸の森において中心的な役割を果たしている陶芸館のあり方について整理する必要。

○　設置当時、陶芸館に求められていた目的･役割(過去の資料より)
信楽焼および陶芸に関する資料の収集･保存･展示とともに、焼物や陶芸に関する研究と情報発信機能
- 展示室　･･･　国内外の陶芸の展示を中心に、レベルの高い陶芸展を開催　(常設展示室･企画展示室を想定)
- 会議室　･･･　陶芸館主催の講演会、研究会の開催など交流発表の場
- 茶室　･･･　信楽焼にふれ、実際に使って味わえる施設
- ミュージアムショップ　･･･　陶芸に関係の深いもの(企画展示に関するもの、学芸員の編集した書籍等)の販売

＋

○　陶芸館の観客数、収蔵品についての現状(スライド5～7参照)

＋

現代的な視点

陶芸館のあり方の検討

○　陶芸の森における陶芸館の担うべき役割
- 芸術的価値のある陶芸品の収集･保存、展示による集客　など

○　陶芸館の美術館としての機能
- 陶芸中心である必要があるのか、現代陶芸である必要があるのか　など

○　今後の展示の方向性
- 求められている展示は何かなど

⇐　収集方針、常設展示の必要性、収蔵庫等の設備面の必要性と関連

3. 陶芸館の展示機能等について

上記の陶芸館のあり方を踏まえたうえで、第1回懇話会資料における陶芸館の展示機能等に関する検討課題への議論

検討課題（第1回懇話会資料より）
- 収蔵品の有効活用も含めた常設展示スペースの必要性
- 収蔵庫拡張の必要性・収蔵庫の状況を踏まえた今後の収集のあり方
- 重要文化財を展示できる設備等の必要性

① 常設展示の必要性

収蔵品の有効活用の観点からは「常設展示」が有効ではあるが、様々な角度からの検討が必要

- 展示以外の収蔵品の活用方法
  → 他館への貸し出し、デジタルアーカイブ化、インターネット展覧会 など

- 県民の陶芸文化に親しむ機会の確保という点では、「常設展」でなければならないのか
  → 第1回懇話会では、単に陶芸だけではなく**「日常生活と関係づけた見せ方」**といった意見もあり、「常設展示」か「企画展示」かということではなく、展示における見せ方が大事ではないか

- 構造上、常設展示と企画展示を同時に行うことは困難だとしても、**常設展示的なスペース**を設けるなどの工夫ができないか

- 仮に新・増築を検討する場合には、**敷地内における適地の有無**（スペースは一定あるものの敷地全体で勾配のある形状）

デジタルアーカイブの一例

陶芸の森全体図

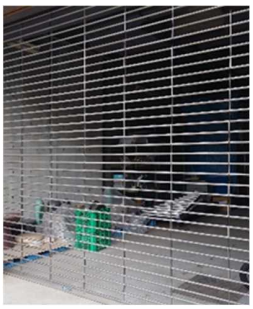
3. 陶芸館の展示機能等について

② 収蔵庫拡張の必要性・収蔵庫の状況を踏まえた今後の収集のあり方

- 美術的価値のある陶芸品を適切に保管することのできる収蔵庫は必要な設備
  → 現在の収蔵庫の設備は老朽化しているだけでなく、収蔵品や他館からの借受品の**適切な保管に苦労している状況**

- 現在の陶芸館の展示機能に対して、適正な収蔵品の規模はどの程度なのか
  （参考：設立当初は、常設展示に必要な数として300件を目標に収集を開始。R5.3現在の収蔵品：1,804件）

- 拡張する以外に収蔵スペースを確保する方策はないのか
  → 空間の有効利用（棚の増設） 等



収蔵庫への搬入口

シースルーであり、小動物の侵入が可能。また、温度湿度が敏感な作品を搬入することが困難。
なお、陶芸館には収蔵庫の前室もない。

③ 重要文化財を展示できる設備等の必要性

- 重要文化財に限らず、展示物の適切な管理等には一定の設備が必要
  → 施設の老朽化だけでなく、そもそもの設計上の問題もあり、**適切な管理に苦労している状況**

- 現代陶芸を中心とした収集方針、現在の収蔵品の状況を踏まえた重要文化財を保管・展示できる設備の必要性

- 抜本的な施設改修が必要となり、工事費の想定が難しい中での必要性
  → 常設展示等のために新・増設を検討する場合における検討事項か

展示室入口

シースルーであり、温度湿度管理の点で効率が悪く、入り口から近いため外気の影響を受けやすい。

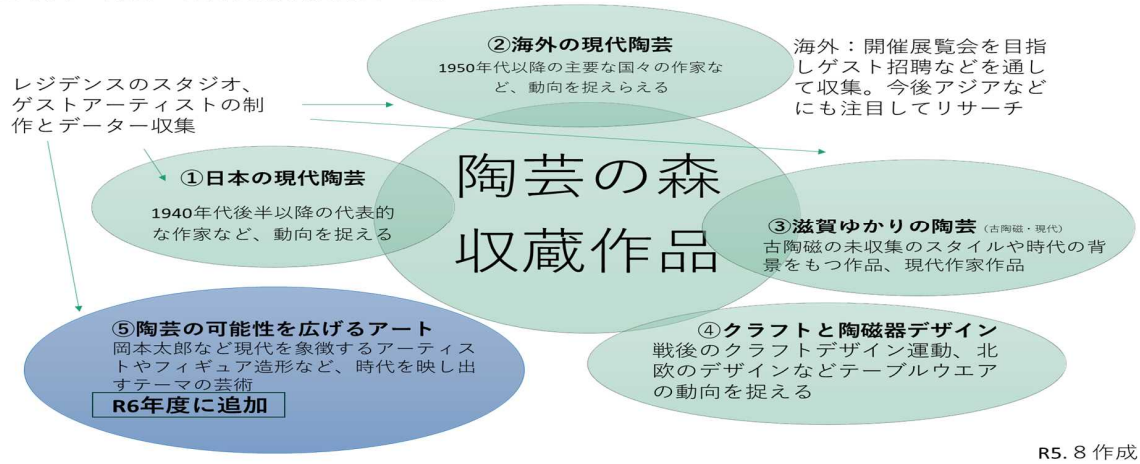
【収集方針の分類ごとの収蔵品の状況】

	区分	日本の現代陶芸	海外の現代陶芸	滋賀ゆかりの陶芸	クラフトと陶磁デザイン
収蔵品の状況	購入	195	143	198	17
	寄付	259	263	486	164
	移管(試験場)	11	0	20	48
	合計	465	406	704	229
代表的な作家・作品		北大路魯山人 「色絵葡萄文扇形鉢」 岡本太郎 「犬の植木鉢」 八木一夫 「壁体」 奈良美智 「少女習作」 	ピーター・ヴォーコス 「スタック」 ルーシー・リー 「鉢」 バーナード・リーチ 「杉山図大壺」 ジョアン・ミロ 「女」 	古信楽 「大壺」 湖東焼 「色絵牡丹図八色絵銘「湖東」」 川崎千足 「ふたまたぐも」 高橋春斎 「信楽しのぎ大壺」 	熊倉順吉 「深海緑コーヒーセット」 神山清子 「小紋皿」 信楽窯業技術試験場 (日根野作三デザイン) 「漬物セット」 門工房(八木一夫デザイン)

【収集方針の分類ごとの収蔵品活用状況】

	区分	① 日本の現代陶芸	② 海外の現代陶芸	③ 滋賀ゆかりの陶芸	④ クラフトと陶磁デザイン
収蔵品の活用状況	H30	53	118	5	30
	R元	43	86	78	6
	R2	8	5	146	5
	R3	14	16	14	0
	R4	15	19	14	33
5年間の稼働数		133	244	257	74
稼働率		32.3%	28.6%	60.1%	36.5%

【R6以降の陶芸の森陶芸館収集方針の柱】



R5.８作成

【令和元年度以降の企画展示の観客数(陶芸館)】

	展覧会名	会期	開催日数	観覧者数	1日平均
令和元年度	特別企画「陶の花 FLOWERS」展	H31.3.12～R元.6.9	78	7,208	110
	特別企画「交流と実験－新時代の〈やきもの〉をめざして」展	R元.6.18～9.6	69	4,552	66
	特別展「北大路魯山人　古典復興－現代陶芸をひらく」	R元.9.14～12.1	67	17,004	254
	特別展「リサ・ラーソン－創作と出会いをめぐる旅」	R2.3.25～3.31	6	1,747	291
令和2年度	特別展「リサ・ラーソン－創作と出会いをめぐる旅」	R2.4.1～6.28	33	9,414	285
	特別企画「湖国・滋賀の陶芸－風土と伝統そして交流のなかで」展	R2.7.18～9.22	58	6,496	112
	特別展「奇跡の土－信楽焼をめぐる三つの景色」	R2.10.3～12.13	62	8,464	137
	特別展「神業ニッポン　明治のやきもの－幻の横浜焼・東京焼」	R3.3.20～3.31	10	764	76
令和3年度	特別展「神業ニッポン　明治のやきもの－幻の横浜焼・東京焼」	R3.4.1～6.6	58	5,097	88
	特別展「Human and Animal 土に吹きこまれた命 21世紀陶芸の最先端」Part1 子どもたちとともに	R3.6.29～9.5	58	4,276	74
	特別展「Human and Animal 土に吹きこまれた命 21世紀陶芸の最先端」Part2 アーティストたちに迫る	R3.9.18～12.19	80	10,815	135
	信楽窯業技術試験場移転記念展「ジャパン・スタイル－やきものXデザインX生活」	R4.3.5～3.31	23	1,182	51
令和4年度	信楽窯業技術試験場移転記念展「ジャパン・スタイル－やきものXデザインX生活」	R4.4.1～6.9	60	4,181	70
	特別展「土に託されたきらめき－子どもたち×アーティスト／セラミックス最先端」	R4.6.25～9.4	62	4,608	74
	特別展「静中動:韓国のスピリットをたどる－開かれた陶のアート」	R4.9.17～12.18	79	7,159	91
	特別企画「湯呑茶碗－日本人がこよなく愛したやきもの」	R5.3.11～3.31	18	1,024	57
令和5年度	特別企画「湯呑茶碗－日本人がこよなく愛したやきもの」	R5.4.1～6.25	74	4,957	67
	特別展「岡本太郎　アートの夢～陶壁・陶板・21世紀のフィギュア造形」Part1	R5.7.15～9.24	62	10,177	164
	特別展「岡本太郎　アートの夢～陶壁・陶板・21世紀のフィギュア造形」Part2	R5.9.30～12.17	68	10,952	161
	特別展「リサ・ラーソン展　知られざる創造の世界～クラシックな名作とともに～」	R6.3.2～3.31	26	-	-

※ リサ・ラーソン、北大路魯山人、岡本太郎など著名人に関する展示会で観覧者数が多くなるものの、それ以外では大きな傾向はみられない。

4. つちっこプログラムについて

つちっこプログラム ・・・ やきものに関する鑑賞教育や体験教育の場を提供
① 子どもやきもの交流事業 ・・・ 学校の授業にあわせた出張型事業(指定管理業務として実施)
② 世界にひとつの宝物づくり ・・・ 来園による創作体験(実行委員会が実施)

つちっこプログラム

子どもやきもの交流事業
(陶芸の森の指定管理業務)

出張授業 (小学校～高等学校)
陶芸体験授業
場所:各学校

※特別な出張講座の場合(休日に実施するイベント等)は実行委員会が担当する。

世界にひとつの宝物づくり事業
(世界にひとつの宝物づくり実行委員会)

来園制作(幼稚園～大学、障がい者、団体)
鑑賞、見学、陶芸体験を組み合わせた活動
場所:陶芸の森

来園見学(小学校～高等学校)
展覧会鑑賞、工房や窯見学、信楽焼のお話など
場所:陶芸の森

検討課題(第1回懇話会資料より)
・ 講師数や焼成スペースの不足
→ 信楽産地や試験場との連携
・ 制作場所等の確保(現在は産業展示館(市施設)を活用)
→ 専用場所の確保
・ 産業・文化振興との連携
→ 信楽産地、試験場等との連携方策

① 窯元における体験もあるなか、**陶芸の森として事業を継続していく必要性**
② 継続する場合においても、**運営主体のあり方**をどう考えるか。(現在は、指定管理事業と実行委員会による事業)
③ **講師候補者の安定的な確保**に向けて、まずは産地の次代を担う方々に講師を経験してもらうことが必要
・ 信楽高校の生徒のインターンシップによる講師体験
・ 若手作家や試験場研修生の講師への登用
} 自身の技術向上や創作活動への刺激にもつながる
④ 滞在作家との交流など、**アーティストインレジデンスとの連携の可能性**
⑤ 制作場所についても、空き工場の活用など**産地との連携の可能性(現在も焼成に町内の焼成窯を活用)**

【つちっこプログラムの利用者の声】(アンケートより抜粋)

参加児童の声

・ 作っているときはちょっといろいろつけ過ぎたかなぁと思ったけれど、土面をもらったときには、なんかいい感じになっていたので、おどろきました。
・ アイディアがふわふわういてきてとても楽しい時間でした。大人になっても忘れられない時間をありがとうございました。
・ 小学校で1回しかできないのですごくいい思い出が作れました。また、自分が何をすればいいかわからない時におしえてくださってありがとうございます。

先生の声

・ 行く前より、信楽や信楽焼に興味を持った子が増えた。
・ 児童一人ひとりに合った声掛けや支援をしていただき、全員が満足できる作品を作ることができた。野外の作品も美術館の作品も興味深いものが多く、「家族と行きたい！」と言う子も多かった。
・ いつもは「見ないで」と作品を隠す子も、自信を持った表情に変わり、堂々と「見て！」と言っていて、陶芸家のサポートが大変ありがたかった。
・ 生徒の実態を伝えると、適切な提案・助言をいただけ、ありがたかった。当日はデザインを考えながら一所懸命に作る子、粘土の感触をじっくり感じて制作する子など、それぞれの実態で活動を楽しむことができた。また、作品が修学旅行のよい記念にもなる。受け入れ、本当に感謝する。
・ 実際に足を運んで自分の目で見ることで、普段より、近くで見たり、他の作品を探したりと、信楽焼に対する関心が高まっていたと感じた。
・ 信楽の町と陶芸体験を通して、滋賀の産業をとても身近に、また誇りに感じたようであった。

5. アーティストインレジデンス事業について

検討課題(第1回懇話会資料等より)
・ 信楽産地との連携(産業振興・人材育成等)
・ 事業成果の県民への還元(見える化)
・ アーティストと地元との関わりがあまり知られていないのではないか(第1回懇話会での意見)

① 施設が老朽化している中、**施設改修の必要性も含め、事業継続していく必要性**
② ワークショップ、信楽高校・試験場研修生、産地事業者との交流など、**産業振興・人材育成等への連携策**
・ 第1回懇話会では、アーティストと子どもたちの交流プログラム(窯場の利用など)といった意見あり
③ アーティストと地元の交流など、**事業そのものをどのように周知**していくか
・ これまで築いてきたアーティストとのネットワークを地元産業の情報発信に生かせないか
④ **事業の成果をどのように県民にわかりやすく伝えるか**

6. 公園機能の魅力化について

検討課題(第1回懇話会資料より)
・ THEシガパークの取組による魅力向上とあわせ、陶芸の森としての公園機能の魅力化
・ 必要となる財源の確保等 (駐車場の有料化 など)

① THEシガパークの全体としての今後の取組(予定)
・ 3つの視点(「美しい公園」、「優しい公園、「楽しい公園」)と3つの取組(「Team Up！」、「Level Up！」、「Tie Up!」)
・ 県内他公園と共同した魅力発信
② 公園機能の魅力化
・ イベント(セラミックアートマーケット、しがらき学ノススメ！)などのさらなる充実
・ 野外展示の充実
③ 財源確保
・ 駐車場料金の徴収 (渋滞緩和につながるか、周辺駐車場との連携、徴収時期・方法等)

7. 人材育成について

検討課題（第1回懇話会委員意見より）
- SNSによる発信等、インターネットを活用した交流の場をつくることが可能になっているが、対応できる人材が必要
- 産業、芸術、地元事業者とアーティストとの交流など、様々な人々をつないでコーディネートできる人材が必要

① ワークショップ等を通じたキーマンの育成　など

8. 産地組合からの意見聴取について　【信楽陶器工業協同組合・信楽陶器卸商業協同組合】

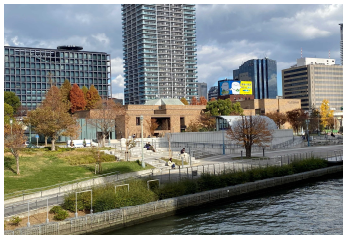
【信楽陶器工業協同組合】
- デザイン性のある付加価値の高い製品に各メーカーは苦慮しているが、地元の作家と協働することで付加価値のある製品の開発が可能になる。海外の作家も含め、作家と地元メーカーが定期的に交流できる場を設けてほしい。
- 海外に目を向けるとニーズのある国もある。海外市場の調査に海外作家を受け入れている陶芸の森に協力してもらえることはないか。
- 陶芸の森に関してできることは協力する。

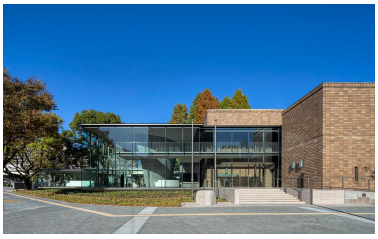
【信楽陶器卸商業協同組合】
- 作家市などのイベントでは地元業者を優先的に参加できるようにしてほしい。
- 陶芸の森は観光・集客という点で非常に大きな役割を果たしており、信楽の地に必要な存在であり、今後もその役割を果たしてほしい。
- 作家と地元メーカーとの交流から新たな商品の開発につなげられればという工業協同組合の意見に同意。
- 陶器だけでは集客に限界がある。
- 陶芸の森に関してできることは協力する。

9. 他府県の類似施設の取組等について【大阪市立東洋陶磁美術館】（年間来場者数　約60,000人）

（1）総論・運営形態
- 2022年～2024年春ごろまでの間、リニューアル改修中。
- 地方独立行政法人による管理運営
  （長期的な人材の確保が可能であり、継続的な事業や研究の実施が可能となることがメリット）
- リニューアルにより、より多くの人が気軽に施設を利用できるというコンセプトのもと、喫茶スペース、ミュージアムショップ等に入館料を支払わなくても利用できるようになる予定。
- 喫茶スペース、ミュージアムショップの運営形態についても、プロポーザル方式で選考した業者への委託に変更する予定。

（2）展示機能・収蔵品等の状況について
- 収蔵庫が手狭で約8割が埋まっている状況
- 展示導線の関係から、特別展と常設展を分けて開催することが難しいため、**一体的に開催して料金を徴収**している。
- 重要文化財の展示を行っており、集客効果も大きいとは感じているものの、エビデンスとしての数字の把握は困難。また、あくまで美術館という教育施設・文化施設としての役割から展示・収集・保管・調査・研究を行っているものである。


美術館外観


美術館入口

展示室

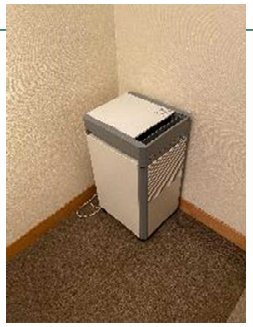
9. 他府県の類似施設の取組等について【益子陶芸美術館】(年間来場者数　約12,000人)

(1) 総論・運営形態
- 直営での運営(過去には指定管理者制度も活用)。
- 施設の老朽化、人員不足、財源の確保が課題
- 施設の運営形態に関する見直しについての議論は、現時点で具体的には行われていない。
- 当初の設立趣旨は、益子を含めた全国の陶芸の見本市(messe)
- 陶器産業振興については地元組合が中心
- 設置目的について、従来の目的であった産業振興から文化振興を中心とする設置目的へ変更予定

(2) 展示機能・収蔵品等の状況について
- 展示室が一本道でつながっているため、常設展・企画展と分けてはいないが、6つの展示室のうち1～2部屋を常設展示としてその時期の企画展の内容と関連した収蔵品の展示を行っている。
- 展示室の空調管理のための設備が不十分。
- 収蔵庫についても手狭(約8割が埋まっている)であり、空調設備が整っていない。
- 収蔵品についても、**全体の20%ほどを主に展示で活用**している。(直近5年)

美術館入口

展示室



展示室内除湿器

9. 他府県の類似施設の取組等について【益子陶芸美術館】(年間来場者数　約12,000人)

(3) レジデンス事業について
- 滞在作家のノルマとして、町民向けオープンスタジオ2～3回、ワークショップ1回、成果展示を1回実施。
- オープンスタジオには町民10～20人のほか、窯業技術センター(県立)の研修生の参加もある。
- 滞在作家が希望すれば、地元の窯元見学を行うこともある。
- 薪窯はレジデンスの作家の方のみが使用
- 公募ではなく、招聘作家が滞在者の多くを占めている。
- 企画展と連携したレジデンスやワークショップを行うこともある。
- 部屋の掃除や生活用品調達の支援等、滞在者の生活面でのサポートに力を入れている。
- レジデンス事業を開始する際には陶芸の森の取組を参考にされたとのこと。

滞在宿舎

制作スペース

薪窯

9. 他府県の類似施設の取組等について【益子陶芸美術館】(年間来場者数　約12,000人)

(4) その他
- 喫茶店・売店については直営で運営。販売商品については組合、地元民芸店に選定を委託。飲食の際の食器をいくつか用意し、利用者が選ぶことができるようにしている。
- 広場スペースについては、普段は利用者の休憩場所や校外学習の際の昼食スペースとして活用するとともに、イベント時(陶器市など)には有料で貸し出し
- 陶器市のときには駐車場料金を徴収。(徴収事務については、一部を外部委託)

遺跡広場

芝生広場

喫茶(食器を選択)

販売スペース(喫茶内)

今後の予定について

令和5年度の状況
令和5年11月21日(火)　第1回懇話会　・・・　滋賀県立陶芸の森の現状等について、現地視察
令和6年3月27日(水)　第2回懇話会　・・・　陶芸の森の事業等のあり方について

令和6年度の予定

5～6月	第3回目 ・ 陶芸の森の事業等のあり方について (主なテーマ) 4. つちっこプログラムについて 5. アーティストインレジデンス事業について 6. 公園機能の魅力化について 7. 人材育成について ・ 施設(ハード)のあり方・方向性について
10～11月	第4回目 ・ 今後の方向性について(素案) ※第3回目までで積み残しになったテーマも含めて意見交換
3月	第5回目 ・ 今後の方向性について(まとめ)